

パンタナール通信

南北米福地開発協会

会報

2007年2月1日

41号



当協会の会員の親睦を深める為、二〇〇七年の最初の集会を一月十四日、事務局前にある大山街道ふるさと会館において行ないました。東京ならびに東京近郊の県に在住する会員の方が参加しました。

当協会の副会長である桜井設雄氏から激励の挨拶があり、その後、当協会の活動に支援して下さる企業から提供された数々の商品の当たるbingoゲームや会員の中から有志が歌を披露してくださいり、楽しい交流の場を持ち、その後、今年の活動も活発に進めて行くことを確認いたしました。

本年度の主な活動は

一・南北米、パラグアイ、レダの地で活躍する南北米

福地財団への継続的人材派遣と経済支援

二・レダにおいて行なつてきた植樹活動の検査の為、

専門家の派遣（三月予定）

三・地球環境保護教育の一環としてのエコツーリズム
レダ地域開発の見学とレダ近郊の自然観察ならびに

世界最大の滝イグアス（世界遺産）等の見学（五月予定）

四・発展途上国への国際協力青年奉仕隊の派遣（八月予定）

五・一日環境セミナーの定期開催（三ヶ月に一度）

六・二日セミナー（人間と自然との共生を為すには）

の開催（三ヶ月に一度）

七・地域活動の活発化（定期的勉強会を全国で開催）

八・支援者（会員）の拡大

右記に記した内容は今日まで継続的に為してきた活動ですが本年は特に、レダにおいて再生可能なバイオエネルギー生産の画期的な試みが本格的に為される年であり、その成功のため、日本からの人的、経済的、そして情報収集支援がより一層、重要になってきています。難しいレダの土地の有効利用を成功させれば、それを同じ難しい環境にある地域に拡大、発展途上国の生活の向上に寄与出来るはずです。

飯野事務総長 レダ近郊訪問

(2006年12月17日、2007年1月3日-4日)



十一月十七日、エスペラ
ンサ村を飯野、上山で訪問。
希望されていた二つの小太
鼓を酋長を通して学校に贈
呈。後ろは当会が建てた
校舎。



一月三日 自宅訪問。庭に
テーブルと椅子を置いて会談。
レダでやつてきたこと、どう
いう考え方でやつてきたか、
写真を見せて報告。

地球環境問題対策と啓蒙と
しての、植樹活動。

教育支援活動。青年ボラン
ティア隊毎年派遣、学校建設
と図書寄贈。

エコ・ツリー啓蒙と実践。
パンタナール観光に寄与。
バイオ・エネルギー生産の為
の研究と実験 時間と資金が
掛かるが、成功すれば近隣の
村々の経済効果に一助。植樹
活動の啓蒙にもなる。
特にバイオ・エネルギー生産
には、非常に心を動かされて
いた。全面的に協力したい、
と言っていた。



人がする人があるが、任がて任がてをしも、樹後ケイ

必要（当面雨季までの一箇月間、水を毎日注ぎ、家畜に食べられないよう工夫する人）、少なくとも先ず、この三点を責任持てるところを探している。オリエンポで受け入れる気持ちがあるか、打診。「是非受け入れたい。自分の学校で責任を持つて対応する。生徒も出す。」と即断。そこで、「まずあなたの意志は分ったが、あなた方のコミッティで植樹の苗は我々が準備するが、なんの木にするかは、今後話し合って決めたい。

従来通り十名前後の日本からの青年中心に、八月下旬から九月上旬の間に予定している。そこで受け入れ側を探しているが、それには植樹する場所の提供、一緒に協力して共同作業を行うボランティアの学生が必要、植

「一つ課題は、オリエンポ市内は、放し飼いのロバやヤギや豚など、やたら家畜が目立ちます。家畜対策を考えないといけません」と尋ねると「苗木ごとに、囲いを作ります。」と即答。

実際は、学校の前の通りに街路樹が植えられているが、ものすごいしつかりした囲いを三角状に造っているのを見たが、何か工夫が必要だ。

アルトパラグアイ州知事（行政区
域はバイアネグラから力サドまで
入る。アコスタ氏）

オリエンポ市、中学・高校の校長
一月四日 （ロドリゲス氏）
以前から、図書の贈呈や図書室
天井資材の提供など、長年交流が
あるので、我々とはよく知りあつ
ている。

目的：今年の青年ボランティア
隊派遣受け入れ打診と打ち合わせ。
植樹の苗は我々が準備するが、
なんの木にするかは、今後話し合つ
て決めたい。

従来通り十名前後の日本からの
青年中心に、八月下旬から九月上
旬の間に予定している。そこで受
け入れ側を探しているが、それに
は植樹する場所の提供、一緒に協
力して共同作業を行うボランティ
アの学生が必要、植

「一つ課題は、オリエンポ市内は、
放し飼いのロバやヤギや豚など、
やたら家畜が目立ちます。家畜
対策を考えないといけません。
と尋ねると「苗木ごとに、囲い
を作ります。」と即答。

実際は、学校の前の通りに街
路樹が植えられているが、もの
すごいしつかりした囲いを三角
状に造っているのを見たが、何
か工夫が必要だ。

今年は環境に優しい石油代替エネルギー開発を！！



飯野事務総長を中心にレダにて新年を迎えた先生方

十一月二十三日 飯野報告

昨日は、定期船アキタバンが、
鈴なりの人々と荷物で溢っていました。

クリスマス・年始の夏休み休暇
が本格化し、年明け10日頃ま
で、労働者も殆ど帰りました。
二十二日午後、にわか雨が降り、
植えつけたジャトロファには惠
みの雨でした。

大山先生の帰国も間近で、二
十三日朝、飛行機が来る予定で
したが、速くても明日になりそ
うです。

今日は飛行機が来ないことが
分り、早速中田先生は、大きな
トラクターに乗つて第二の橋方
面の道路整備に出かけました。
大山先生が滞在していた半年近
くの期間の大半が、水が最も高
く上がり、引いていくのに数ヶ
月掛かつたため、支流沿いの奥地への道路が、水没して使えな
かつた為、第一の橋の方面に行つ
たことが無かつたというので、
私が車で案内してさし上げまし
たが、蒼く輝く水面に空の雲と
ヤシの木が映り、その向こうに
大草原が広がり、つがいのトウ
ユユや白鷺たちが憩う様や、草
花の鮮やかに咲いている様に、
「気持ちがいいですねえ！」と
感動しておりました。この年末
年始、実質現場の責任を持たれ
る上山先生が、「この人数でど
うやって行つたらいいんだろう」と
心もと無い様子です。それで
も数少ない労働者を連れて、草
刈に行きました。雨季は春から
夏の期間ですから、草の成長の
速いこと、一週間前に刈り取っ
た建物の周りの草がもう大きく
伸びてきています。



ひまわり油から、ディーゼル（写真左端ピン）造り成功の中田先生。

右はジャトロファ栽培担当の伊達先生

ワールドウォッチ研究所

(地球白書 一〇〇六 七より)

【バイオディーゼルとは

どんな燃料なのか】

エタノール以外で利用の多いバイオ燃料にはバイオディーゼル・植物油とアルコールを八対二の割合で混ぜて触媒を加え、グリセリンを分離させた後に残るさらさらした液体ーがある。

軽油と任意の比率で混合しても、

或いは純正で現行のディーゼル

エンジンに使用してもよい。既

存のエンジンには粘度が高すぎ

るが、二タンクシステム(軽油

のタンクと植物油のタンクを搭

載。軽油のタンクでエンジンを

始動させ、数分間軽油で走行す

る。植物油が温まり粘度が下がつ

たらタンクを切り替えて植物油

で走行する。エンジンを切る前

に再度タンクを切り替えて軽油

で走行し、エンジン内に冷えた

植物油が残らないようにする)

採用の自動車なら走行可能だ。

【飛躍的拡大を遂げる
バイオディーゼル】

世界のバイオディーゼルの九十五%は菜種やヒマワリの種を主原料としてヨーロッパで生産

されている。ドイツが半分以上
のシェアを有し、残りはほぼフ
ランスとイタリアが占める。

生産量が急増しているブラジ

ルとアメリカでは、原料に大豆

を使うのが一般的となりつつあ

る。アメリカの生産量は一九九

〇〇四年は九五〇〇万リットル

へと飛躍的に增加了。

バイオディーゼルの小規模生

産も伸びており、たとえば北ア

メリカの農家、飲食店から出る

廃油用油でバイオディーゼル燃

料を自給する地域共同組合、地

域産植物油を原料とするスワジ

ランドやタイやザンビアの地域

社会など、様々な場所で作られ

ている。

バイオディーゼル推進の動き

は、一部で宗教的ともいえる熱

気を帶びている。

毒性が無くそのままで生分解

性を持ち、旧型車を若干改造す

れば単独でも、軽油と混合して

も使用可能で、健康を脅かす軽

油と混合しても使用可能で、健

康を脅かす軽油に代わる環境に優しい燃料というのが推進派の主張である。

【建設ラッシュが続く
バイオ燃料工場】

従来からの燃料と同様、エタノールとバイオディーゼルの用途も陸上輸送に限らない。ブラジルではエタノールを燃料とする小型飛行機が三〇〇機あまり航行している。世界有数の航空機メーカーで、初のエタノール飛行機を製造したエンブラエル社にはガソリン燃料機のエンジンをエタノール仕様に改造する依頼が殺到し、2年待ちの状況となつていて。バイオディーゼルも海上輸送での利用が進みつつある。世界各国でバイオ燃料工場の開設が相次ぎ、短期生産量は急伸する見通しである。

中国吉林省には、アメリカの平均的な蒸留施設の八倍の生産能力を持つ世界最大のエタノール工場が誕生した。同国ではエタノールとガソリンの混合燃料を推進する市や省が増えている。一方、インドではディーゼル部門へのバイオディーゼルの進出を加速するためバイロット工場が建設されている。

一二日セミナー
二月十七、八日

川崎市民プラザ
詳しくは事務局にお問い合わせください。

タノールとバイオディーゼルの用途も陸上輸送に限らない。

ブラジルではエタノールを燃

料とする小型飛行機が三〇〇機あまり航行している。世界有数の航空機メーカーで、初のエタノール飛行機を製造したエンブラエル社にはガソ

リン燃料機のエンジンをエタ

ノール仕様に改造する依頼が殺到し、2年待ちの状況となつていて。バイオディーゼルも海上輸送での利用が進みつつある。世界各国でバイオ燃料工場の開設が相次ぎ、短期生産量は急伸する見通しである。

中国吉林省には、アメリカの平均的な蒸留施設の八倍の生

産能力を持つ世界最大のエタ

ノール工場が誕生した。同国ではエタノールとガソリンの混合

燃料を推進する市や省が増えて

いる。一方、インドではディ

ーザル部門へのバイオディーゼ

ルの進出を加速するためバイロ

ット工場が建設されている。



一一〇七年度 環境セミナー
第一回 三月十日

午前一〇時一 午後五時まで
場所：南北米福地開発協会事務局

費用 三千円（昼食付き）

内容 地球温暖化と植樹の重要性、
レダ開発について

南北米福地開発協会 事務局
〒二二一三一〇〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口三一十一十五

岩崎ビル四F

Fax ○四四一八二九一二八二一
会費納入 ハ二九一二八二一

一〇一八〇一七七六八〇四七一

郵便口座

代表 柴沼邦彦

主張である。

(p-一八一-二〇)